

## 反転授業を実施するための工夫： オンデマンドビデオとグループワークの設計とその連携

向後千春・石川奈保子  
（早稲田大学）

### 1. はじめに

ブレンド型授業（blended learning）は、狭義ではeラーニングと対面授業を組み合わせた授業形態である。eラーニングの役割で分類すると、予習タイプ、復習タイプ、補習タイプに分けられる（富永・向後 2009）。対面授業の前にeラーニングで知識を学び、課題を提出する予習タイプは、近年では「反転授業（flipped classroom）」と呼ばれている。

日本の高等教育現場においても、2000年代後半から反転授業が行われてきた。たとえば、向後（2008）では、eラーニングとワークショップスタイルの対面授業を隔週で交互に実施した。また、重田ら（2013）では、対面授業に先だってオープン教材を視聴し、対面講義では教材についての討論を行った。これらの授業は受講生から概ね高い評価を受けている。

反転授業と成績の関連については、eラーニングで予習して対面授業に出席するというサイクルに適応できるかどうかやeラーニングの成績に影響を与えるという（富永・向後 2009）。また、予習で教材ビデオの視聴時間が長かった受講生は、短かった受講生よりも成績がよかった（重田ら 2013）。これらのことから、反転授業の成否は、受講生がeラーニング教材で十分予習ができるかどうかにかかっているといえる。

一方、eラーニングによる予習のおかげでレクチャーをする必要がなくなった、教室での対面授業では、グループワークやワークショップスタイルの実習をデザインする必要がある。うまくデザインされていないグループワークはともすれば散漫になりがちであり、活気はあるけれども成果が身につかない授業にもなりかねないからである。

本報告では、反転授業を2008年から6年間実践した経験から、オンデマンドビデオと教室でのグループワークの設計とその連携についてまとめたい。

### 2. オンデマンドビデオの設計の工夫

(1) ビデオは自分のパソコンで収録できる ビデオ収録は専用のスタジオがなくても、自分のパソコンで可能になっている。収録・編集用のアプリケーションは安価に入手することができる。たとえば、TechSmith社のCamtasiaというアプリでは、パソコン画面表示したものをそのまま録画でき、それを講師の顔画像と組み合わせて収録することができる。自分だけでの収録は気軽であるし、失敗しても気にすることはない。そのうちに収録することに慣れてくる。放送ではないのだからシナリオを作る必要もない。スライドを見ながら普通に話せばよい。言い間違えても気にしない。むしろその方が見ている方は親しみがわくだろう。ビデオの長さは最長でも15分程度で区切りを入れた方がいい。正味1時間のレクチャーであれば、15分のビデオを4本作るようにする。そうすることによって利便性が高まり、結果として学生がよく視聴してくれるようになる。

(2) 大学の学習支援システム以外にも配信チャンネルはある 大学に動画配信システムがあれば、それで配信をする。そうでなくても、YouTubeの限定配信（URLを知っている人のみが視聴可能）によって配信することもできる。この場合は、スマホなどのモバイル機器でも視聴できるので、さらに便利である。

(3) ビデオには必ずクイズと課題をつける ビデオにはその内容に関連したクイズと課題を必ずつける。よく「ビデオはワンクリックで見たように偽装できる」と批判する人がいるけれども、そうできない仕掛けを作ればいいだけの話である。そのためにはクイズが効果的である。15分のビデオに対してひとつの選択肢クイズを用意する。自動採点ができるようにしておくとう間がかからない。課題は、ショートレポートくらいの分量（400字程度）で、教室授業でのグループワークに直結するような内容を出す。グループワークは課題の内容を使ってできるように設計する。そうすることで、課題に真剣に取り組むようになるだろう。

### 3. グループワークの設計の工夫

(1) 5、6人でグループを作る グループ人数は5、6人が最適である。これよりも多くなると参加しない人がでてくるし、これよりも少なくなると一人ひとりの負荷が高くなりすぎる。グループ分けすることにより、数十人のクラスでも、300人のクラスでも対応することができる。グループメンバーは、男女、学年が混在するようにランダムに編成する。また、2、3回の授業で解散し、新たに作り直すことで公平感を維持することができる。

(2) はじめにアイスブレイクをいれる 新しいグループになったら、最初にメンバー同士が打ち解けるようにアイスブレイク活動を入れる。自己紹介だけでなく「最近のマイブーム」などのテーマをいれるとよい。慣れてきたら、アイスブレイクの時間を使って、スピーチの練習をすることもできる。要するに活動のウォーミングアップなので、何をやってもよい。とすれば、就活に役立つような自己表現の練習などもできる。

(3) 活動の指示は具体的にして、時間は短く区切る グループワークは「話し合い」ではない。何をやるのかを具体的に指示する。話し合いをさせる場合は、グループ内で司会役（ファシリテーター）と記録係を決めて、話し合いの内容を可視化する。活動の時間は長くても15分で区切り、そこでの成果を代表者に発表させるなどして、必ず出させるようにする。時間管理を各自ができるように、キッチンタイマーを書画カメラでスクリーンに映しておくとう効果的である。

### 4. まとめと展開

この授業は、オンデマンド講義＋課題の週と教室でのグループワークの週が交代する形式での反転授業であった。これ以外にも反転授業の形式は考えられる。たとえば、毎週教室授業があり、その予習としてオンデマンドを使うというようなものである。あるいは、オンデマンドの週に続き、2週連続で教室での実習をおこなうなど、科目の内容と性質によってさまざまなバリエーションが実践されていくだろう。

インターネットと学習支援システムを利用することにより、学生を個別にモニターし、助言を与えることができるようになった。これからは、教室での学習活動とオンライン個別学習の組み合わせによって、教員と学生の双方にとって効果的・効率的な教育方法が開発実践されていくだろう。

#### 引用文献

向後千春（2008）eラーニングと教室授業のブレンド型授業の実践と評価．教育システム情報学会第33回全国大会講演論文集，90-91．

重田勝介，布施泉，岡部成玄（2013）オープン教材を用いた反転授業の実践と分析．日本教育工学会第29回全国大会講演論文集，223-226．

富永敦子，向後千春（2009）ブレンド型大学授業における授業形態の好みと成績の関連．日本教育工学会研究報告集，JSET09-4:19-24．